

507) プライオリティーシート

最近の若者の中には電車の中でやたらと脚を投げ出したり、我がもの顔にシートにゆったりと座って、立ってる老人などがいても、そ知らぬふりを決め込んでいる者が少なくない。こんな光景を目にすると、年のせいかオイラは無性に腹が立つ。

さて会社の帰りに地下鉄に乗ると、女性ばかりが4人プライオリティーシートにゆったりと腰を下ろしており、シートの間がやたらと開いている。オイラは「失礼！」と無愛想に言うと少々詰めてもらって、ちょっと強引に結構でっかいケツを押し込んだ。すると隣の女性が露骨に嫌な顔をして立ってしまったのである。そんなつもりじゃなかったのだが、「あっ、済みません！」と声を駆けたものの、こちらも何となくバツが悪かった。そしてふと向かい側のシートを見ると、男女4人が座っている。オイラはさきほどは一瞬、スカスカだったから5人掛けのシートと思ったのだが、どうも4人掛けの所に強引に割り込んだらしい。なるほど嫌な顔をして立っていったのはそういうことだったのだと、今度はなんとも気まずい思いが込み上げてきた。混んだ電車ではなかったから、向こうの座席からはこちら側がモロ見えである。何とかこの気まずさを脱する手立てはないかと、オイラはいろいろと思案に暮れた。そして3つ目の駅に着いたとき、名案が浮かんだ。昨年椎間板ヘルニアで脚が不自由になったときのことを思い出したのである。オイラはやおら立ち上がると、片足を引き摺るように歩いて、このプライオリティーシートから脱出したのであります。